

# 日本初記録のシセンクロテントウ (新称) を含む 本州産チビクチビルテントウ属 3 種の記録

伊藤 淳<sup>1)</sup>・阪本優介<sup>2)</sup>・歳清勝晴<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 〒 183-0012 府中市押立町 5-1-25

<sup>2)</sup> 〒 252-0001 座間市相模が丘 1-27-22 ルネ小田急相模原 モア・ステージ 1201

<sup>3)</sup> 〒 206-0812 稲城市矢野口 92-8

## Records of Three *Telsimia* Species Including *T. sichuanensis* Pang et Mao, New to Japan, from Honshū (Coleoptera: Coccinellidae)

Jun Itô, Yûsuke SAKAMOTO and Katsuharu TOSHIKIYO

東京都稲城市と神奈川県川崎市で採集したチビクチビルテントウ属 *Telsimia* 3 種のうち、1 種は日本未記録種、1 種は本州での記録が少ない種であった。他の 1 種は本州からよく知られる種であるが、互いの比較のために本州各地の標本を参照したので、3 種合わせて報告する。

データ中に採集・保管者名がないものは伊藤淳採集・保管のものである。

### 1. シセンクロテントウ (和名新称) *Telsimia sichuanensis* Pang et Mao, 1979 (図1, 4)

1♂, 東京都稲城市長峰 (稲城中央公園), 14. I. 2017, 阪本優介採集・保管; 東京都稲城市大丸 (多摩川河川敷): 2♀♀, 2. VI. 2017; 2♂♂, 4. VI. 2017; 1♂2♀♀, 16. VI. 2017; 1♂2♀♀, 20. VI. 2017; 2♂♂, 24. VI. 2017; 1♀, 11. X. 2017; 2♂♂3♀♀, 12. X. 2017; 東京都稲城市押立 (多摩川河川敷): 2♂♂ 1♀, 3. X. 2017; 2♂♂ 1♀, 12. X. 2017.

稲城中央公園ではケヤキ生木の樹皮下で越冬中のものを得た。稲城市大丸では多摩川右岸の河川敷でよく得られる。10 本ほどのオニグルミに少数

のエノキ等を交え、付近にヤナギ類も生える小規模な林で、主としてオニグルミのスイーピングで得たが、エノキとヤナギからも得ている。このポイントから 1 km ほど下流の押立では、10 月になってクワとオニグルミのスイーピングで得られた。

日本初記録。体長 1.7–2.0 mm。同定は本種の原記載 (Pang & Mao, 1979) と Ren *et al.* (2009) によった。中国四川省から記載された種であるが、Ren *et al.* (2009) は分布を中国 (陝西, 四川, 湖北, 浙江, 江西, 福建, 広西, 海南, 香港) としている。

ナガサキクロテントウの項で述べるように、京都府下にも分布する。

### 2. ナガサキクロテントウ *Telsimia nagasakiensis* Miyatake, 1978 (図2, 5)

東京都稲城市押立 (多摩川河川敷): 2♀♀, 18. V. 2017; 1♂, 4. VI. 2017; 1♂, 24. IX. 2017; 1♀, 神奈川県川崎市多摩区 (多摩川河川敷), 26. VI. 2017, 歳清勝晴採集, 伊藤淳保管。

押立ではオニグルミのスイーピングで 9 月まで得られたが、10 月に前記のシセンクロテントウが同じ地点で得られるようになってからは本種は得



図1-3. チビクチビルテントウ属 *Telsimia* 3 種。1, シセンクロテントウ♂ (稲城市産, 歳清撮影); 2, ナガサキクロテントウ♀ (稲城市産, 歳清撮影); 3, クロテントウ♂ (南越前町産, 阪本撮影)。



図4. シセンクロテントウ♂交尾器（稲城市産，伊藤撮影）．S：サイフォ，TL：包片（側面），TV：包片（腹面），l：側片，m：中央片．



図5. ナガサキクロテントウ♂交尾器（稲城市産，伊藤撮影）．S：サイフォ，TL：包片（側面），TV：包片（腹面），l：側片，m：中央片．

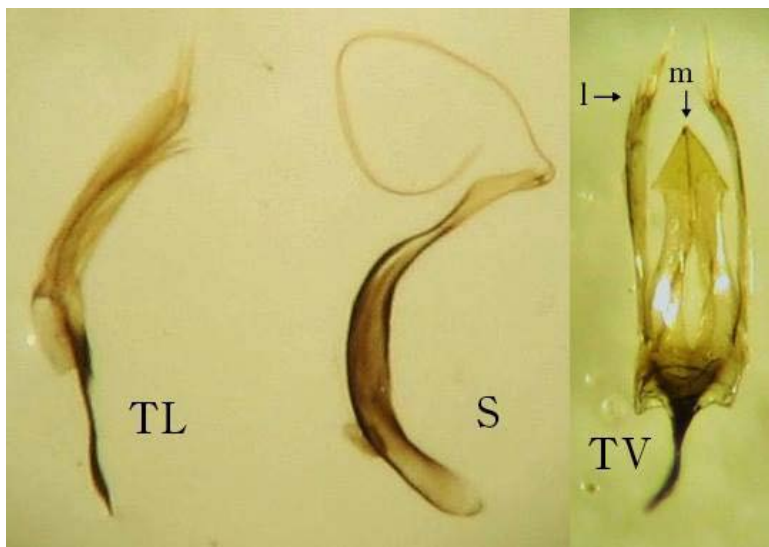


図6. クロテントウ♂交尾器（南越前町産，伊藤撮影）．S：サイフォ，TL：包片（側面），TV：包片（腹面），l：側片，m：中央片．

ていない。押立からさらに 1.5 km ほど下流の川崎市多摩区ではエノキの葉上に見出した。付近には

オニグルミも見られた。

神奈川県初記録。同定は本種の前記載 (Miyatake,

1978) によった。

本種の分布は日本環境動物昆虫学会編 (2009) によれば伊豆八丈島、九州、対馬、平戸島、天草島、甌島とされているが、その後、京都府下 (齋藤, 2015) と東京都の東京港野鳥公園 (高桑・酒井, 2015) から記録された。しかし、齋藤 (2015) が交尾器の写真を掲載した1♂は、その交尾器形態から明らかにシセンクロテントウであり、同時に記録された他の個体についても再検討が必要であろう。

### 3. クロテントウ *Telsimia nigra* (Weise, 1879) (図 3, 6)

東京都稲城市坂浜(市営ふれあいの森付近):1♂, 6. XI. 2010; 1♀, 27. X. 2013; 1♂, 東京都八王子市丹木町(滝山自然公園), 15. III. 2013, 阪本優介採集・保管; 1♀, 神奈川県川崎市多摩区柘形, 26. XII. 2015, 阪本優介採集・保管; 福井県南条郡南越前町今泉:2♂♂, 15. VII. 2017, 西野洋樹採集, 阪本優介保管; 1♂, 22. VII. 2017, 西野洋樹採集, 阪本優介保管; 1♀, 岡山県岡山市牟佐(旭川河川敷), 30. V. 2004, 山地採集・保管; 1♀, 岡山県岡山市高松(山地, 1987 記録個体); 1♂, 岡山県倉敷市酒津(山地, 1987 記録個体)。

稲城市の2例は丘陵地の雑木林でピーティングとスイーピングによって得たもので、八王子市と川崎市ではケヤキ樹皮下で越冬中のものを得た。

福井県では海岸沿いのトベラと思われる木のスイーピングで得られている。岡山市牟佐のものはラベルに「増水ゴミ」とある。

本種は松原 (2003) が東京都で「極めて普通」、平野 (2004) は神奈川県において「各地に普通」と述べている。しかし、稲城市で2009年頃から甲虫全般を採集している伊藤は上記の2頭しか得ておらず、また神奈川県をはじめとする各地で2006年頃からテントウムシを採集している阪本も2頭しか得ていない。松原・平野以後短期間で激減してしまったのかどうか、今後も注意を払っていきたい。

同定は Sasaji (1971) によった。

以上3種の本州産 *Telsimia* は♂交尾器(図4~6)で明瞭に区別できる。以下、交尾器各部分の名称は佐々治 (1998) に従う。シセンクロテントウとナガサキクロテントウの♂交尾器は一見やや似ているが、包片 tegmen の側片 lateral lobes がシセンクロテントウではきわめて短くて細く、通常は中央片 median piece の基部両脇に密着して認め難いものに対し、ナガサキクロテントウでは中央片よりやや短い程度にまで発達する。またサイフォ siphon

は、シセンクロテントウでは基部から先端までほぼ同じ太さであるのに対して、ナガサキクロテントウでは先端半分が基部半分より明らかに太い。

外部形態は3種とも互いによく似ているが、上に記録した個体の範囲内で、以下のような区別点を見出している。

1. 上翅の微毛は、クロテントウではS字状に波曲する。シセンクロテントウとナガサキクロテントウでは波曲せず基部から後方に向かう。ナガサキクロテントウでは翅端まで直線的だが、シセンクロテントウでは翅端の手前から左右に開いていく。
2. 頭盾は、シセンクロテントウでは全体が薄黒く半透明。ナガサキクロテントウでは明るい鉛色で透明度が高いが、基部は狭く黒ずむ。クロテントウでは黒いが、先端部は狭く鉛色半透明。
3. 口器・触角はナガサキクロテントウでは黄褐色。シセンクロテントウでは黒色~黒褐色だが、大腿はやや淡色。クロテントウでは黒色~黒褐色だが、大腿・下唇前基節・下唇鬚は淡色。
4. 肢の色は、ナガサキクロテントウでは腿節を含めて黄褐色。シセンクロテントウでは腿節は黒色。クロテントウでは腿節は黒色~黒褐色(ときに赤褐色)。両種とも脛節と跗節は腿節より淡色で黄色味を帯び、中にはナガサキクロテントウとの区別が難しい個体もある。従って、日本環境動物昆虫学会編 (2009) の絵解き検索のように、上から見て脛節と跗節の色で同定できるというのは誤りであろう。

### 謝辞

筆者らは中村涼氏の私信からヒントを得て稲城市におけるクロテントウ以外の *Telsimia* 属の種の存在に気づき、この研究を始めた。西野洋樹・山地治両氏には貴重な標本を調べる機会をいただいた。末長晴輝・高井泰両氏には文献の入手について御教示いただいた。松原豊氏にはナガサキクロテントウが神奈川県未記録であることを確認していただいた。以上の各氏に厚く御礼申し上げる。

### 引用文献

- 平野幸彦, 2004. コウチュウ目. 神奈川昆虫談話会編, 神奈川県昆虫誌, pp. 335-835. 神奈川昆虫談話会, 小田原.
- 松原 豊, 2003. 東京都のテントウムシ科. *Leptalina*, (151-156): 621-644.
- Miyatake, M., 1978. The genus *Telsimia* Casey of Japan and Taiwan (Coleoptera: Coccinellidae). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, 14 (1-2): 13-19.
- 日本環境動物昆虫学会編, 2009. テントウムシの調べ方. 148 pp. 文教出版, 大阪.

- Pang, X. F. and J. L. Mao, 1979. Coleoptera: Coccinellidae (Part 2). Economic insect fauna of China (14). 170 pp. Science Press, Beijing. (In Chinese.)
- Ren, S. X., X. M. Wang, H. Pang, Z. O. Peng and T. Zeng, 2009. Colored pictorial handbook of ladybird beetles in China. 336 pp. Science Press, Beijing. (In Chinese.)
- 齋藤琢巳, 2015. 京都府下におけるナガサキクロテントウの記録. 月刊むし, (531): 60.
- Sasaji, H., 1971. Coccinellidae (Insecta: Coleoptera). Fauna Japonica. ix + 340 pp., 16 pls. Academic Press of Japan,

- Tokyo.
- 佐々治寛之, 1998. テントウムシの自然史. 251pp. 東京大学出版会, 東京.
- 高桑正敏・酒井 香, 2015. 東京港野鳥公園のテントウムシ類. 神奈川虫報, (186): 24-26.
- 山地 治, 1987. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (122): 24-28.

(2017年10月14日受領, 2018年3月2日受理)

## 【短報】京都府から初記録のカミキリモドキ科甲虫2種

カミキリモドキ科甲虫は同定が困難であり, 研究者も多くないことから, 地域甲虫相目録に掲載されていないことがある。

2017年11月, 筆者は, 自身が保管する京都府北部産カミキリモドキ科標本全個体を秋山秀雄氏に同定していただいた。その結果, 京都府初記録と思われる次の2種が含まれていたので報告する。

### 1. コウノカミキリモドキ *Nacerderdes (Xanthochroa) konoii* (Nakane, 1954)

1 ex., 舞鶴市上安・五老ヶ岳, 30. VI. 2000, 1 ex., 同所, 2. VII. 2000; 1 ex., 同所, 21. VII. 2001; 1 ex., 同所, 8. VIII. 2001, 黒田亘採集, 筆者保管; 1 ex., 同所, 2. VII. 2000; 2 exs., 同所, 10. VII. 2000, 筆者採集, 筆者および他者保管; 1 ex., 同所, 12. VII. 2000, 筆者採集, 筆者保管; 1 ex., 同所, 27. VI. 2011, 林智子採集, 筆者保管 (図1)。1 ex., 綾部市睦寄町・君尾山, 6. VII. 2017, 筆者採集・保管。

### 2. ハイイロカミキリモドキ *Eobia (Eobia) cinereipennis cinereipennis* (Motschulsky, 1866)

2 exs., 舞鶴市西神崎・由良川河口, 18. VI. 2015,

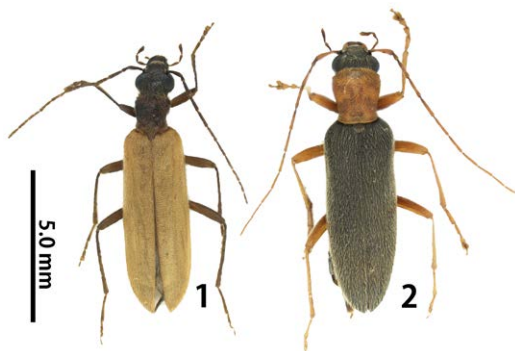


図1-2. 京都府産カミキリモドキ. 1, コウノカミキリモドキ; 2, ハイイロカミキリモドキ.

筆者採集・保管 (図2)。

以上の2種は, 京都府自然環境保全課 (2015) に記載がなく, 関西甲虫談話会会員数名の方に京都府における記録について照会したが, 情報が得られなかったため, 京都府未記録と判断した。

コウノカミキリモドキは, キバネカミキリモドキ *Nacerderdes (Xanthochroa) luteipennis* (Marseul, 1877) と外観がよく似ており, 筆者が後者と同定していた14個体のうち10個体は前者であった。

ハイイロカミキリモドキは, 海岸地帯に多い (宮武, 1985) とのことであり, 舞鶴市西神崎・由良川河口の砂洲に自生するハマボウフウの花に多数見られたが, 2016年および2017年のハマボウフウ開花時期に同所を訪れた際には1個体も確認することができなかった。

末筆ながら, 標本の同定をしていただいた秋山秀雄氏, 標本写真の撮影をしていただいた愛媛大学ミュージアムの吉富博之博士, ならびに本種の京都府における採集例を調べていただいた関西甲虫談話会会員諸氏に心からお礼申し上げる。

## 引用文献

- 京都府自然環境保全課, 2015. 京都府レッドデータブック 2015 別冊京都府自然環境目録. 415 pp.
- 宮武睦夫, 1985. カミキリモドキ科, 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 (編), 原色日本甲虫図鑑 (III): pp. 401-408, pls. 68-69. 保育社, 大阪.

(黒田悠三 624-0851 舞鶴市大内野町 47-3)